

2025年2月27日 日本子ども宣教局伝道学校（子ども）

シム・ジュウファン先生

がくいんふくいんか がつ  
学院福音化3月

## 「神の神殿としての集中と旅程」

Iコリ 3:10-11、16-17

3月の学院福音化メッセージから、私なりに決めた3月1か月間の主題です。

「神様の神殿としての集中と旅程」

コリスト人への手紙第一3章の10節から11節、16節、17節を読みましょう。

10 私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。ほかの人がその上に家を建てるのです。しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。

11 だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。"

16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御靈が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。

17 もし、だれかが神の宮を壊すなら、神がその人を滅ぼされます。神の宮は聖なるものだからです。あなたがたは、その宮です。

聖書をほかの表現で言うなら、神殿を作る話だと言えます。旧約聖書を見れば、絶えず人間は町を築いて、神殿を作ろうとする姿を見ることができます。

最初の神殿がソロモン神殿ですが、ダビデが作る準備をしたでしょう。ダビデはある日、決断をしました。「私はこのように良い宮殿に住んでいるのに、神様の契約の箱を置く神殿がない」その話を聞いた、その当時の預言者ナタンが、神様からこういうことばを聞きます。ダビデによって神殿を作らないように。その場面を見ましょう。I歴代17章1節から6節を読んでみます。

歴代誌第一17章1～6節

01 ダビデが自分の家に住んでいたときのことである。ダビデは預言者ナタンに言った。「見なさい。この私が杉材の家に住んでいるのに、主の契約の箱は天幕の下にある。」

02 ナタンはダビデに言った。「あなたの心にあることをみな行いなさい。神があなたとともにおられるのですから。」

03 その夜のことである。次のような神のことばがナタンにあった。

04 「<sup>い</sup>行って、わたしのしもベダビデに言え。『主はこう<sup>い</sup>言われる。あなたがわたしのために、住む<sup>す</sup>家を建てるのではない。

05 わたしは、イスラエルを連れ上った日から今日まで、<sup>のぼ</sup>ひこんにち 家に住んだことはなく、天幕から天幕に、<sup>まくや</sup>幕屋から<sup>まくや</sup>移ってきたのだ。

06 わたしが全イスラエルと歩んだところどこででも、わたしが、わたしの民を牧せよと命じたイ  
スラエルのさばきつかさの一人にでも、「なぜ、あなたがたはわたしのために杉材の家を建てな  
かったのか」と、一度でも言ったことがあつただろうか。』

このように、神様はダビデに「わたしは、いつ家を建ててほしいと言ったか」という話をされま  
す。ダビデは、神様という全能者、創造主を神殿に閉じ込めておこうとする姿を見せたということ  
です。この話の後半には、また、このように話されます。10節から14節まで見ましょう。

#### 歴代誌第一17章 10～14節

10 それは、わたしが、わが民イスラエルの上にさばきつかさを任命して以来のことである。こう  
して、わたしはあなたのすべての敵を屈服させたのである。今、わたしはあなたに告げる。主  
があなたのために一つの家を建てる、と。

11 あなたの日数が満ち、あなたが先祖のもとに行くとき、わたしはあなたの息子の中から、あな  
たの後に世継ぎの子を起こし、彼の王国を確立させる。

12 彼はわたしのために一つの家を建て、わたしは彼の王座をとこしまでも堅く立てる。

13 わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。わたしの恵みを、わたしはあなたより前にい  
た者から取り去ったが、彼からはそのように取り去ることはしない。

14 わたしは、わたしの家とわたしの王国の中に、彼をとこしまでも立たせる。彼の王座はとこ  
しまでも堅く立つ。』

今ここで話されているのは、単純にダビデの息子、ソロモンによって家を建てて、その国を堅く  
立つようにするという約束ではありません。ソロモンという名前の意味は何でしょうか。「シャロ  
ーム」ということばと同じ意味です。「平和の王」です。ですから、イエス・キリストについて、そ  
の方によって完成された国のこと話をされておられるのです。10節にも明確に語っておられます。「主  
があなたのために一つの家を建てる」と。14節にも話しておられるでしょう。わたしが永遠に彼  
を、わたしの家とわたしの国に、神様が神の国を立たせるという話をされます。

このように、神殿ということは神様が建てられるのであって、人が建てるのではありません。それにもかかわらず、人間は神様のために自らの力と熱心の価値を証明しようと、神殿を建てるというでしょう。結局、神様は建てる事を許されます。

ローマ人への手紙を見れば、パウロがこのように書いたでしょう。それゆえ、律法の法の下に置かれ、すべての人を不従順のうちに閉じ込めたと言われています。それは、「一度してみなさい」ということです。結局、それを通して、私たちが罪人であることを、私たちの力で何かできる者ではないということを、悟らせようとされるのです。ただ罪人に對してあふれんばかりに注がれる神様のあわれみを悟らせるためです。それゆえ、旧約聖書に登場する神殿は、人間が自分たちの力と努力と熱心で天に達しようとする、とても高慢の塔を建てることに過ぎないです。

弟アベルを殺したカインは、自分がもっと大きな罰を受けるのではないかと思って、町を築いてその中に閉じ込もって暮らします。息子の名前をエノクとつけて、町の名をエノクとして、その中にいたのです。外部からの威嚇に、自ら自分を守ろうと思ったのでした。創世記11章でのバベルの塔事件も同じです。人間が自分たちの力を合わせて、町と、頂が天に届く塔を建てて、自分たちの名をあげようとしたのでした。それが高慢です。そして、初めての神殿だったソロモン神殿もそうで、二番目に作ったヘロデ神殿も同じでしょう。神殿が意味すること、その内容は完全に忘れて、形だけが残りました。それゆえ、旧約聖書の最後のマラキ書では、どのように門が閉ざされるのか、前にもお話ししたでしょう。だれかが神殿の門を閉めてほしいという内容で終わります。

では、そういう古い神殿の前にイエス様が来られて、壊されるべき古い神殿として、十字架にかかりました。ヘロデ神殿の前で、イエス様がヨハネ2章19節に、「この神殿を壊してみなさい。わたしは三日でそれをよみがえらせる」と言されました。ところで、それが意味することを21節で明らかに語られました。この神殿を壊してみなさいと言われたのは、「ご自分のからだという神殿について語られたのだった」と言われています。そのように壊さなければならない古い神殿として、イエス様が死なれ、新しい神殿として復活されたのです。それによって、人間が天のまことの神殿に至ることができる唯一の道は、イエス様ご自身だけだ、イエス様しかないということを明らかにされたのです。そのように、古い神殿が人間の努力と熱心と義を前面に出すことだったとすれば、新しい神殿は、ただイエス・キリストの恵みによって入るということを現わすのです。

「恵み」というのは、人間の可能性を否定することばです。受けることができない者に与えられること、返す力がない者に与えられることです。ところが、私が何か少ししたのがあって受けたなら、恵みは恵みになりません。私がこの恵みに何か報いることができうだと考えるならば、それも恵みにならないのです。それゆえ、恵みというものは、私たちの価値、可能性、人間側の、

すべてが否定されるものなのです。それゆえ、神様の神殿として建てられたことは、恵みによってだけなされることを、エペソ人への手紙では恵みで救われたと表現しているのです。エペソ2章5節から6節です。

### エペソ人への手紙2章5、6節

- 05 背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生きてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。
- 06 神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座させてくださいました

恵みによって救われたというのは、恵みによって神殿になったということと同じことです。このみことばを見ると、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生きてくださいましたと書いてあります。完了形です。また、キリストとともに天上に座させてくださいました、これも過去形で完了形です。完成がすでに完了したのです。それが霊的な私たちの現実です。今、私たちはどこに座っていると書いてありますか。天上に座させてくださいました。天上とはどこでしょうか。詩篇11篇4節を見ましょう。

### 詩篇11篇4節

主はその聖なる宮におられる。主はその王座が天にある。その目は見通し そのまぶたは人の子らを調べる。

前半のみことばも重要ですが、後半の「その目は見通し そのまぶたは人の子らを調べる」ということばに注目しましょう。ここに神様の私たちに向かった集中が入っているのです。私たちが神様に集中する以前に、先に神様がすべての集中をもって私たちを見ておられるということです。どこででしょうか。すでに完成された天で、天国で。このように、神様は完成された神の国で、私たちを観察して、摂理して、治めて、守っておられます。しかし、私たちは今、肉をもつて、この地に生きています。この地を生きる間、見えない天のことを説明してくださるために、地のことによって私たちで説明してくださるのです。それゆえ、私たちはこの歴史、そして人生を生きる間には、主がくださった信仰ということを通して、目には見えない天のを見て学ぶのです。

そして、ここでは私たちが神殿で建てられていく途中だという表現もしています。すでに神殿として完成されているのですが、この土地では建てられていきつつあるという表現をしています。

## エペソ人への手紙2章 20~22節

20 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。

21 このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。

22 あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げられ、御靈によって神の御住まいとなるのです。

日本語の聖書のことばでは分かりにくいのですが、韓国語の聖書には明らかに言われています。

「ともに築き上げられ」ということばが、現在進行形で書かれています。神殿として築きあげられつつあるということです。

それでも、相変らず天のことには関心がなく、地のことにだけ目を向けて関心を持って集中して生きていきます。どのようにすれば、さらにすばらしくて、華やかな神殿を作り出せるだろうかと。皆さんが考えている天国のイメージはどんなものでしょうか。これも何度も申し上げていますが、私が考えているすべてのことが備えられている所が天国だと思っていませんか。それでは、実際に行ったら失望するかもしれません。それもすべておろしてください。神様が提示しておられる目的地に、私たちは何も関心なく生きているのではないでしょうか。そのようにして建てられて行っているのは、神殿としての材料としては不充分な材料で建てられている状態であるとも言えます。

聖書には神殿を測量する、測る、そのような表現のみことばがたくさんあります。代表的に黙示録11章1、2節を見ましょう。

## 黙示録11章 1、2節

01 それから、杖のような測り竿が私に与えられて、こう告げられた。「立って、神の神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。

02 神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはいけない。それは異邦人に与えられているからだ。彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みにじることになる。

測量をして、少しでも神様のみこころに合わないようになつてられたところがあれば、神様の榮光がそちらへ入ることはできません。

エゼキエル書では、エゼキエルが幻の中で神殿を測量する内容が出てきます。そこで、神様が見せられたサイズのとおり、すべて完ぺきに作っておいたところ、そちらへ神様の栄光が入ったという内容があります。すると、神殿を測量するということは、何の意味でしょうか。イエス・キリストの恵みという材料によってだけ、完全に建てられたのか。そうでなければ、自分たちの熱心、努力、そのようなことで建てられたのか。私たちはここに本当に深い默想をしてみる必要があります。

神様のために私が何かをすると今、錯覚して生きているかもしれません。黙示録11章2節を見れば、神殿の外の異邦人は、そのままにしなさい。測らずにおいておきなさいと書いてあるでしょう。なぜでしょうか。異邦人は、神様の神殿に入つてくることはできない者です。神殿の中には、恵み、イエス・キリストの恵みによって建てられた神様の民だけが入ることができます。異邦人の庭は、そのまま置いておきなさいと言われています。

このキリストの恵みによって、イエス・キリストの恵みによってだけ建てられるということを、もう少し説明するなら、先ほどのエペソ人への手紙でも何度も出てきていますが、キリストにあって(キリストの中で)ということばと同じことです。キリストの中に、キリストにあってということは、キリストというものすごく大きいプールの中に、完全につかっている状態のことです。これはプールの中で足もつかないところにつかっていれば、死にます。キリストの中に完全につかって死になさいということです。

外の庭はそのままにしておきなさいと言われていて、そして、私たちはエクレシアとして呼ばれました。神様の関心は教会にあります。教会堂ではなく、神の民にあるのです。上で見た詩篇11篇にあったでしょう。エクレシアということばは、「エク」(外へ)「カレオ」(呼ぶ)の合成語で、「外へ呼ばれた」という意味です。それゆえ、私たちはすでに神様から離れたこの世から神の国に呼ばれた者たちです。

最後に、旅程についての部分を少し説明します。私たちは、しきりに私の義を表わしたがることを神様もよく分かっておられます。エペソ2章22節に、「御靈によって神の御住まいとなるのです」という表現をしていますが、これがとても慰めになることばです。聖靈がおられる、それ自体が慰めでしょう。助け主と言われています。イエス様が助け主が来られてなさることは、どんなことかを明らかに語られたことがあります。ヨハネ15章26節です。

ヨハネの福音書15章26節

わたし  
が父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御靈が来るとき、その方がわたしについて証ししてくださいます。

聖靈が私たちの中に来てなさることは明らかで、一つだけです。イエス・キリストについて証ししてくださいと言われています。ローマ人への手紙を見れば、私たちの弱さをよくご存じなので、聖靈が神様のみこころにしたがい、私たちのために、うめきをもってとりなしてくださいと言われています。

聖靈に満たされることをいつも求めてください。神様が目的として定められた目的地に導いて行かれる方が、聖靈です。その旅程の中で、私たちの生活を通して、イエスだけが証しされるようにしてくださいます。使徒の働きに出てきた使徒のすべての歩みは、すべて聖靈に満たされて導かれる中で、神様のみこころである目的地に導かれて行く旅程でした。使徒たちの旅程は、そうでした。ですから、皆さんもいつも聖靈に満たされることを祈って、また、キリストだけが証しされる生活、旅程を歩むように願います。

以上です